



初秋の横倉山南斜面

サシバの渡りのルート・横倉山

サシバは、猛禽類モウジウライの中の体長50センチ〔翼長：70～80センチ〕ほどの“中型のタカ”である。渡り鳥で、日本列島を經由する“渡り”のルートには、主として、芭蕉の俳句にも「鷹一つ見つけてうれし伊良湖崎」とすでに詠まれているように、愛知県渥美半島突端の伊良湖岬いらかのぼろ（中央構造線沿い）から徳島県の鳴門の南をかすめ高知市の鴻ノ森こうのもりを経て九州、沖縄と列島沿いに南下するルートと、長野県の白樺峠から鳴門を経て高知県横倉山を通過した後同じコースをたどって南下するルートがあるようである。

2003年9月28日（日）、博物館友の会では、横倉山第一駐車場において「サシバの渡り観察会」を行った。当日は、快晴でその一週間ほど前からすでに上空を舞うサシバの姿が確認されていたので期待されたが、あいにくこの日は数羽以上の群れには至らなかった。それでも、双眼鏡越しに見る



サシバ(撮影：深瀬茂文)

尾羽の模様もようの美しさには感動するものがあった。横倉山では、上昇気流を求めて集まってくるサシバが、ピーク時には一日に3000羽以上も見られることもあるようである。

牧野富太郎博士とゾルンホーフエンの石灰岩

安井 敏夫

ドイツのゾルンホーフエンと言えば、1861年に世界で初めて「始祖鳥：Archaeopteryx（アルカエオプテリクス）」の全骨格化石が発見された所として地質学の世界では有名である。ミュンヘンから車で2時間ほど行ったドイツ南部のドナウ川流域のバイエルン地方に位置する。ここから産出する石灰岩〔Solnhofen 石灰岩〕（日本で見られる石灰岩を想像してはいけない）は、すでに古代ローマ時代から、街道の敷石や民家の壁・床などの土木・建築用の石材として盛んに切り出されていたといい、現在でも建材として用いられている。きめが細かく、硬くて割れにくく、しかも、板状に切り出しやすい淡黄色の特徴ある石灰岩である。年代的には、ドイツ人地質学者・ナウマン博士が世界に初めて紹介した日本の「鳥ノ巣石灰岩」と同

じ中生代ジュラ紀後期の約1億5000万年前のもので、恐竜の栄えた時代の浅海（陸に近いラグーン〔潟〕）に静かに堆積した地層である。整然としていて粒度が細かく炭酸カルシウム（CaCO₃）を90パーセント以上含むといった性質上、それに含まれる化石は極めて保存状態がいい。しかも、トンボ、バッタなどの昆虫の他、エビ、クラゲ、“生きた化石”のシーラカンスやカブトガニなどの450種類にも及ぶ種々の動物化石がまるで絵画のように鮮明に印象として岩石の表面に残されている。当博物館にもエビ、トンボ、バッタの化石標本が展示されている。ここで発見された始祖鳥に至っては、羽毛までもがはっきりと見てとれ、それ故爬虫類から鳥類への進化の途上の生き物（“中間種”）であるとして注目されることになった。

このゾルンホーフエン石灰岩、中でも「フリント」と呼ばれる炭酸カルシウムを95～98%含むものは、別の面でも大変有名である。それは、上述の“きめが細かく、板状でありながら割れにくい”という性質から、19世紀には「石版印刷」用の石（石版石灰岩または“石版石”）として世界中に輸出され使用されるようになったことである。始祖鳥の学名：Archaeopteryx lithographicaも“石版刷



エビの化石



バッタの化石



----- 国境線

りの古い翼」という意味である。実は、この石灰岩を植物の石版画（リトグラフ）として印刷するために日本で最初に、しかも、独自で印刷技術を習得し使用したのが植物学者・牧野富太郎博士である。博士は幼少の頃から自ら進んで納得のいくまで勉強する“独学の人”であり、努力家でもあった。結局、博士は自分で植物画を描き、自分で製版・印刷し、東京帝国大学理科大学（現東京大学理学部）の植物学教室に出入りしていた26歳の1888年（明治21）に、『日本植物志図篇』第1巻第1集を自費出版した。この記念すべき図篇の出版は、当時の植物学の世界的権威であったロシアのマキシモヴィッチ博士が、牧野博士の植物画の正確さを絶賛するほどのものであったらしく、牧野博士自身にとっても納得のいくものであったし、また、日本の植物学史上画期的な大変意義のあるものであった。ちなみに、この図篇の巻頭の第1図版を飾ったのが、博士のお気に入りの植物の一つであった高知県横倉山産のユリ科植物「トサジョウロウホトトギス」である。牧野博士が前年の1887年に横倉山で最初に発見し、学名〔*Tricyrtis macrantha* Maxim.〕をマキシモヴィッチ博士が、和名を牧野博士が命名した“横倉山タイプ植物”の一つである。レモン色の光沢のあるみずみずしい花の美しさを、昔宮中に仕えた貴婦人（女嬭）にたとえたもので、横倉山を代表する牧野博士ゆかりの植物の一つである。残念ながら今は絶滅危惧種に指定されており、自生している数は少ないが、何とか保護し次の世代まで受け継いでいきたいものである。

残念ながら、牧野博士がリトグラフ用に実際に使用した石版石は現存しないようであるが、牧野博士と地質学との間にまたもや意外な接点があった。

（やすいとしお／横倉山自然の森博物館副館長兼学芸員）



牧野富太郎博士による「トサジョウロウホトトギス」のスケッチ
 （註：『日本植物志図篇』に掲載されているものは単色）



『日本植物志図篇』
 （1888年（明治21））

〔資料提供〕
 高知県立牧野植物園

横倉山を歩く

斎藤 政広

私が子どもの頃は、横倉山のことを「みたき」と呼んでいたが、特に気を止めるような存在ではなく、ただ単に家の近くにある山としてのみの存在だった。横倉山を意識したのは、中学生の頃家族で正月に日の出を見に住吉の断崖（800年前の修験道の行場の一つ）へ行ったときだった。普段通り慣れている自分の家のある市山から南斜面の山道を父と妹の3人で真暗闇の中を登って行った。途中敵傍山眺望所付近でテントを張り泊まっている人を見かけて恐ろしかったことを覚えている。

その後、学校の遠足、行事でもよく登ったことが記憶に残っている。その頃は、山へ行けば子どもたちにとってみれば宝の山。木の実、アケビなどと食べるものは豊富、原生林は遊びには格好の場所。ターザン遊びが盛んな頃だったので、木の上ばかりで遊び、秘密基地をつくり、木の実や空木で笛を作ったり、廻りの道は手作りの“四輪車”でと、遊びや遊び道具にはことかかない状況だった。その頃は、植物や地質には何の興味も持たず、ただそこにあるものを利用して楽しみを味わっていたという感じであった。

高校生になって地学部に入部し、初めて化石というものを知った。横倉山の化石は石灰岩の中に含まれており、三葉虫、クサリサンゴ、ハチノスサンゴの化石を採りに行った。そのうち洞窟にも興味を持ち、主に佐川町の石灰岩地の洞窟の調査をしたが、横倉山にも幾つかの洞窟があり、すべての洞窟の調査をした。その中には、四国で二番目に深い縦穴洞窟もある。この頃、やっと地質・化石等に興味を持ち始めたと思う。

高校卒業後も、何かにつけて登る機会があり、真冬の雪の横倉山、自分の子どもたちの学校行事等で行ったが、子どもの頃の経験で案内役もできるようになっていた。ただし、この頃の案内は道案内だけだった。

その後、役場に入り仕事の関係で横倉山との付き合いは長くなっていった。山での生活という視点から見ると、体験・経験したものでないとか分



原生林内のツルアジサイの巨大ツル（直径：約10cm）と筆者

らないことがたくさんあり、少しの知識であるが植物の名前や謂れ、利用方法などを交えながら道案内をすると大変喜ばれることがある。

今、このように昔の山の生活を体験したことを話す機会が少なくなっていると思う。その頃のことを知っている人も高齢化している。山を歩けば昔の山の様子など、昔はこうだったと懐かしく思い感激してくれる人、そういう人と一日横倉山の歩きをすると、充実した日を過ごしたなあと自分自身嬉しくなる。

最近では、以前のように山を生活の場として暮らす人はほとんどいない。山の手入れも行き届かず放置されたままになっている。山の役割、山との関わりなどを考える時期にきている。横倉山までの山道は、以前は水が出ていて休憩所となっていた所も今は水はない。植林の中は昼間でも薄暗く何の景色も見えない。でも、横倉山の山頂付近は数百年の自然を残している県内でも数少ない場所である。ほっとできる、楽しみながら歩ける、思い出が詰まっている所、そこが横倉山だと思う。行く度に新しい出会いを作ってくれる、新たな感激を与えてくれる、そのような横倉山と一緒に歩きませんか。

（さいとう まさひろ／横倉山自然の森博物館館長）

博物館ニュース

夏休み博物館教室

【昆虫教室】

8月3日(日) (講師：越知小学校非常勤講師・高橋厚彦先生、参加者数：小人11人、大人9人〔今年は、トンボの採集の後に標本作りを計画していたので、参加者数を20人に限定させて頂いた〕)

最初の日高村岩目地加古という採集地は、東西1500m、南北100mの広さの遊水池があり、その北には幅20mの川ながれているため、ここでは止水性のチョウトンボやショウジョウトンボ、ギンヤンマ、流水性のオニヤンマやハグロトンボなど計20種類のトンボが観察された。

この後、佐川町平賀野にある虚空蔵山の麓に場所を移動し、植林の中を流れる小川でオニヤンマのヤゴを採集した。特に、今年は地上約2mの高さの杉の梢にオニヤンマの脱皮殻を発見することもできた。これは、今年は、夏休みまでに高知県に台風の襲来があったり、豪雨に何度か見舞われたためではないかと想像される。

午後からは、麓のタコ公園で、家族や参加者どうし協力し合ってトンボの標本作りを行ったが、全員の標本作りへの真剣な取り組みに、大変感心させられたことだった。

この半日の自然との体験と心のふれあいが、一夏のすばらしい思い出となってくれることを願いつつ、午後3時半帰路についた。



【植物教室】

8月10日(日) (講師：高知市子ども科学図書館指導員・恒石直和先生、参加者数：小人11、大人7)

最初、博物館の回りの植物について学習する。杉・桧は日本にしかなく、世界最古の木造建築・法隆寺の建材は柱を含めすべて桧で、高知城も桧で築かれているという。また、葉からはヒノキチオールという毒消しの臭い成分が出ていて、そのためよく蒲葎（カマキリ）と一緒に入れられる。その他、アゲハチョウが食べるカラスザンショウ〔ミカン科〕、インガキチョウが食べるイヌビワ〔イタブ〕〔クワ科〕や土佐和紙の原料であるコウゾ〔クワ科〕、地球物理学者・寺田寅彦が随筆にも書いたクサギ〔クマツヅラ

科〕、伊勢神宮や出雲大社などが神事に火を起こす時に使うというヤマビワなどを観察する。

次に、室内でジャガイモとサツマイモのデンプンを顕微鏡で観察した後、レモンを半分に輪切りにした切り口にそれぞれ銅板とアルミ板を差しコードで連結して、生じた電流でメロディーを鳴らすおもしろい科学の実験も行うなど、いろんな学習で子どもたちの目が輝いていた。



【化石教室】

8月24日(日) (講師：横倉山自然の森博物館学芸員・安井敏夫、参加者数：小人30、大人19、その他5)

今年は、横倉山の南山麓を流れる仁淀川の支流・坂折川で、横倉山から運ばれてきた4億年前の日本最古の大型化石の採集を行う。

最初に河原で見られる主な岩石について簡単にその名称と成り立ちについて説明した後、化石の含まれる日本最古のシルル紀の石灰岩(“土佐桧”石灰岩)を目当てに化石探しをしてもらう。昭和50年の台風による豪雨で横倉山南斜面の石灰岩の転石が坂折川に大量に流れ込み、かつては、石灰岩の転石も多くいろんな化石が簡単に採集できたが、その後の河川改修工事で現在はほとんど目に付かなくなってしまう。それでも、今回は大勢の参加者がいたため心配していた以上にたくさんの石灰岩が見つかり、かつてのサンゴ礁を形成していたクサリサンゴ、ハチノスサンゴ、日石サンゴ(“太陽”サンゴ)などのサンゴの化石を結構みんなが採集することができた。



自然の中で親子で楽しく一緒に行う化石採集に、太古へのロマン、親子のスキンシップを抱きつつ、一夏の思い出となることを願いたい。

企画展：「横倉山と天狗高原の植物展—石灰岩地を彩る森の芸術家たち—」 [2003年4月29日(火)～6月1日(日)]

横倉山と天狗高原(四国カルスト)に自生する、珍しい植物の写真(50点)、植物標本(100点)を展示。植物の美しさや素晴らしさについて理解を深めてもらうと同時に、人と植物の共存できる優しい自然環境造りについても興味・関心を持っていただく機会とした。

この他、スマミレ科やラン科の植物、斑入りの植物の鉢植え(50鉢)も同時に展示した。



キレンゲショウマ(天狗高原)

企画展：「鉱物の世界—自然の造形美—」

[2003年7月27日(日)～8月31日(日)]

地元高知県内及び日本産の鉱物や蛍光鉱物など130点余りの世界のさまざまな魅力ある鉱物を展示。鉱物を通じて、自然が織り成す色・形の美しさ、希少性、そして、意外性などの、鉱物のもつ自然の姿—造形美—を紹介し、併せて、鉱物と人間との関わりについても理解してもらう。具体的には、イギリスの大英博物館を初め世界の主な自然系の博物館には大抵展示されているという愛媛県市ノ川鉱山の輝安鉱(スチブナイト)、日本で最初に見つかったハート形の双晶を成す日本式水晶、銅の鉱床である層状含銅硫化鉄鉱(キースラガー)などの日本を代表する鉱物や日本人が世界で最初に製品として使用したヒス



砂金採りを体験

イの他、ダイヤモンド、エメラルド、ルビー、アクアマリンなどの宝石の原石、顔料(岩絵の具)としての鉱物、インクなどさまざまである。

体験として、川砂中から砂金を捜し出す“砂金採り”を実施し、一夏の思い出としてももらった。

企画展(共催)：「横倉山と仁淀川流域の鳥たち」

[2003年10月4日(土)～11月3日(月・祝)]

日本野鳥の会高知支部会員・深瀬茂文氏の協力を得て、会員の撮影した四季折々の野鳥の写真を中心に写真展として開催した。

清流仁淀川の流域とその一角にある自然林の豊かな横倉山で見られる、ヤイロチョウ、クマタカ、オオタカ、アカショウビン、オオアカゲラ、オオルリ、サンコウチョウ、カワセミ、ヤマセミ、アオサギ、ゴイサギなどの留鳥・渡り鳥の写真約60点の他、鳥に関する興味あるQ&A18問、いろんな鳥の羽などを展示。ヤイロチョウ(高知県指定天然記念物・高知県の県鳥)については剥製も同時展示。

野鳥たちの自然の生徳・生活ぶりを写真を通じて紹介し、身近でも自然の中で生きていくためのさまざまな野鳥たちの可愛くもあり、また、真剣なありのままの姿をみることができると、そして、そのためには、自然や野鳥たちに対する思いやりがなくてはならない、ということをも同時に多くの人たちに知っていただく一つの機会としてもらう。



ウズ

友の会だより

「鳥形山の植物観察会」

平成15年度の友の会の最初の行事として、高知県仁淀村鳥形山の植物観察会を行った。

5月18日(日)(案内:KUTVテレビ高知勤務・吉岡郷雄氏、指導:高知市子ども科学図書館指導員・恒石直和先生、参加者数:大人18(内事務局3))



鳥形山は、日鉄鉱業(株)が1968年(昭和43)から石灰石を採掘している石灰岩から成る山で、一部は「鳥形山森林植物公園」に指定され、石灰岩地を好む植物を初め数多くの美しい植物が自生している。牧野富太郎博士によって1889年(明治22)に発見・命名された鳥形山をタイプとする植物には、トリガタハンショウズル、ヒメキリンソウ、シコクスミレがある。

木漏れ日の差し込む新緑のまぶしい明るい自然林の間をぬって走る登山道脇には、あちこちにヤマシャクヤクが咲き、少し開けた日当りの良い場所では小群落が見られ、横倉山にはない違った植物相や趣きがある。横倉山と共通する植物としては、四国では横倉山と徳島県の剣山にしかないといわれるヨコグラツクバネ〔絶滅危惧種〕が見られた。また、牧野富太郎博士によって発見・命名され、日本人によって初めて学名が付けられたヤマトグサがヤマシャクヤクの傍でひっそりと咲いていた。鳥形山は四季折々に実にさまざまな美しい植物が観られ、横倉山とは対照的でまた一味違った大変魅力的な山である。

「サシバの渡り観察会」

[2003年9月28日(日)](講師:日本野鳥の会高知支部会員・黒岩哲夫氏、参加者数:大人11(内事務局2))

「福井県立恐竜博物館視察研修」

[2003年10月4日(土)、5日(日)](参加者数:大人11(内事務局4))

越前町を朝の6:00に出発し、14:30に約760年前の鎌倉時代に道元によって開かれた坐禅修行の道場・永平寺に到着、約1時間拝観する。修行僧は3時半起床、寝ている時も修行、御手洗いをを使うのも修行、日常生活のすべての行いが修行という。また、「仏心とは自分のことはさておいても、世のため人のために尽くそうという心に他ならない」ことを会得する。夜は参加者全員で一緒に食事をとり、親睦を計った。

2日目は朝一番に博物館を見学する。地元勝山の恐竜について主任研究員から説明を受けた後、各自館内を視察研修する。福井県立恐竜博物館は、実物6体を含む恐竜の全身骨格35体を展示する恐竜に関する日本最大の本格的な博物館であり、子どもから大人まで楽しみながら見学・学習できるようになっている。特に、地元勝山の日本産の恐竜の化石をもとに日本で最初に全身骨格〔2体〕が復元された意義は大きい。これにより、かつて日本にも体長4~5メートル級の恐竜が生息していたことがわかり、子どもたちに夢とロマンを与えるものである。それにしても、普段実物大の恐竜骨格を見たことのない者にとっては、その大きさには驚くべきものがある。博物館見学後予定していた「恐竜化石発掘体験」は、残念ながらこの期間開放されておらず体験できなかった。一行が帰路につき越前に着いたのは夜ももう遅い10:30であった。



ティラノサウルスに「一呑み」の人類!

「博物館友の会「フォレストクラブ」の平成15年度の活動」

- 4月29日(火・祝) 藤山のアケボノツツジ観察会〔高知県富毛市〕
- 5月18日(日) 鳥形山の植物観察会〔高知県仁淀村〕
- 5月10日(土) 友の会運営委員会
- 5月24日(土) 友の会総会
- 6月21日(日) ヒメボタル観察会〔横倉山〕
- 7月31日(木) 星の観察会Part I〔博物館〕
- 8月26日(火)~28日(木) 星の観察会Part II〔博物館〕
- 8月23日(土) 夏休み木工教室〔博物館〕
- 9月7日(日) 初秋の横倉山観察会
- 9月28日(日) サシバの渡り観察会〔横倉山〕
- 10月4日(土)・5日(日) 福井県立恐竜博物館視察研修
- 11月16日(日) 横倉山紅葉祭り
- 12月14日(日) クリスマス・リース教室〔博物館〕

横倉山ミニ歳時記

■ツルシキミ〔ツルミヤマシキミ〕

Skimmia japonica Thunb. var. *intermedia* Komatsu f. *repense*
(Nakai) Hara

ミカン科の常緑低木。茎の下部が地上をはい、上部は斜上して高さ30～50センチほどになる。ミカン科のため葉はもむと一種の芳香がある。果期は9～10月で、果実は通常赤く熟し、実の少ない冬場の雪の積もった場所にあざやかな実の赤色が印象的である。北海道・本州（日本海側）に主に分布し、四国・九州の太平洋側では、冷温帯の山地の上部に生える。横倉山では、安徳天皇陵墓参考地西方や読勝山眺望所などでまとまって見られる。長たらしい学名は、ツルシキミがミヤマシキミ(*Skimmia japonica*)の変種であることを意味する。



博物館日誌(抄) ('03.3～'03.12)

- 4月29日(火・祝)～6月1日(日) 企画展:「横倉山と天狗高原の植物展ー石灰岩地を彩る芸術家たちー」
- 7月27日(日)～8月31日(日) 企画展:「館物の世界ー自然の造形美ー」
- 8月3日(日) 夏休み博物館教室(昆虫)
- 8月10日(日) 夏休み博物館教室(植物)
- 8月23日(土)～8月29日(金) 学芸員実習(4名)
- 8月24日(日) 夏休み博物館教室(化石)
- 8月26日(火)～28日(木) 星空(火星)観察会
- 10月4日(土)～11月3日(月・祝) 企画展(共催):「横倉山と仁淀川流域の鳥たち」
- 11月15日(土)～12月14日(日) 企画展(共催):「西村洋一 水彩画展『光と風の旅』」

スタッフの声、声、声

(斎藤) 博物館の事務室から見えるサザンカが今年は例年以上にたくさん花を付けています。いつもなら、この花にメジロ、シジュウカラなどの小鳥が来てにぎやかなのですが、今年は秋が深まって暖かい日が続き、まだ山には木の実などが残っているのか、小鳥の姿は見えません。毎年楽しみにしている小鳥の姿はもう少し先のこともかもしれません。自然というものは一定ではなく、毎年毎年いろいろな場面を見せてくれます。

(小田) 博物館では、自然をテーマにした企画展を展開しています。昨秋には、写真展「横倉山と仁淀川流域の鳥たち」と「西村洋一 水彩画展『光と風の旅』」を開催しました。写真展は、自然界でたくましく、そして美しい野鳥の姿を観ていただきました。水彩画展では、日本の四季・美しい景色を見事に描いた西村洋一氏の作品をご覧いただきました。これからも、太古からの原生林が今なおのこる横倉山、その麓に建つ博物館としての使命を担っていきたいと思います。

(安井) 博物館の回りのサザンカの花が咲き始めると、1年の終わりが近づいたことを感じる。ピンク、紅、白の順で咲き、花の少ない鬱鬱な冬場に彩りを添えてくれる。今年は開館6周年を迎え、博物館、友の会の行事と何かと慌ただしい充実した一年であった。これからも、小規模ながら一人でも多くの来館者に感動を与える企画展を開催し、人々に親しまれる博物館にしていきたいと願っている。

(小松) 横倉山に度々登っているうちに登山靴が壊れました。何年前か前に旅行をしたときの記念に買った靴でした。毎日毎日雨ばかりの旅行でしたが、たまに晴れた日の空や空気すがすがしさが大変印象に残っています。じっくり冷えた何もか

もを車の上いっぱい広げ、次第に膨らむ寝袋や乾く靴を見ると、これから何かいいことに出会いそうな気がしました。それから数年、僕とともに歩んできたその靴の修理代は、もう一足買えそうな金額になりますが、修理してまた使います。これからもよろしくお願ひします。

(黒瀬) 昨年の秋、どうしても見たい植物があり、事務員みんなで横倉山に登りました。しかし、結局見ることができず、一年待つことに……。そして、待ちに待った今年の秋!……だったのですが、時期もあり、都合も合わず、登ることができませんでした。来年こそは!……と思うと共に、それを待たなければいけない儼がゆさを感じる一方、その時季にしか見ることができないという“ありのままの自然の姿”を改めて感じ、また、素晴らしいと思ひました。

(伊藤) 肌寒さを通り越して寒くなってきました。窓越しに見えるメタセコイアの並木が黄緑色に変わり、黄色・オレンジ色へと少しづつ色づいてきました。奥にあるサザンカは、淡い紅色の花を咲かせています。雨が降る薄暗い日にも色あざやかです。

(福岡) 最近、博物館のアンケートをリニューアルしました。その中で、「友の会」についての質問項目があるんですが、「友の会を知らない」と言う方が多いです。でも、「興味がある」という方が多数居てくれている事を嬉しく思います。会員でない方は、是非入会を! 会員の方は、是非友人にお話を! 友の会のイベントは、きっと「自然と季節と歴史」を感じることでできるものであるはずです。みんなで一緒に、貴重な、珍しい植物を観察しながら横倉山に登って、眺望所で食べるお昼ご飯が絶品なのです(笑)

高知県越知町立

横倉山

THE YOKOGURAYAMA NATURAL FOREST MUSEUM ON

自然の森博物館

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知内737番地12
TEL.0889(26)1050 FAX.0889(26)0620

- 開館時間: 午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日: 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料: 大人……………500円
高校・大学生……………400円
小・中学生……………200円
(半券20名以上の団体は100円引)
- 越知への交通
高知 高知自動車道30分 伊藤自動車道30分
佐川 バス約15分 越知

